

方言タイプPA#2の発見？

ー長崎県対馬・壱岐方言の動詞テ形における形態音韻現象ー

有元 光彦*

Discovery of Dialect Type PA#2?
ー Morphophonological Phenomena on the *Te*-Form Verb in the Tsushima and Iki Dialects of Nagasaki Prefecture ー

ARIMOTO Mitsuhiko*

(Received September 29, 2023)

本稿の目的は、長崎県対馬・壱岐の4方言を対象とし、そこに起こるテ形音韻現象を記述することにある。さらに、対馬の佐護方言で発見された新たな「方言タイプPA#2」があり得る方言タイプであるかどうかについて検証していく。まず、対馬の佐護方言においては、新たな方言タイプのほかに、方言タイプTGが見られている。また、対馬の豆敷方言では方言タイプPAが観察される。同じ対馬に、同じPA系が分布していることは、「方言タイプPA#2」を仮定できる証拠になる可能性が高い。また、地理的分布の考察からも、壱岐方言をはじめ、近隣に類似の方言タイプが分布することから、その仮説がさらに支持できることになる。「方言タイプPA#2」の発見は、従来から仮定されている方言タイプPAにもさらなるバリエーションがあることを示すものである。今後、テ形音韻現象のより詳細な分類が求められる。

1. はじめに

本稿の目的は、長崎県対馬（つしま）・壱岐（いき）方言を対象とし、その動詞活用形の1つであるテ形（「～して」などの形）に起こる形態音韻現象を記述することにある。記述対象は、対馬市上県町佐護（かみあがたまち さご）・厳原町豆敷（いづはらまち つつ）及び壱岐市芦辺町（あしべちょう）である。

テ形に起こる形態音韻現象は、「テ形音韻現象」と呼び、次のように定義する（cf. 有元2007）。

（1）テ形音韻現象：

動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分が、動詞の種類によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

例えば、ある方言では、「書いてきた」を [kakkita] と発音し、共通語の「テ」に相当する部分にいわゆる促音が現れる。しかし、＜取ってきた＞は [tottekita] と発音し、[tokkita] とは発音しない。この場合、「テ」

に相当する部分には [te] しか現れないのである。この違いは、動詞の種類、すなわち動詞語幹末分節音（stem-final segment）の違いによるものと考えられる。有元（2007:99）では、この違いを記述するために、初期の生成音韻論（Generative Phonology）の枠組みを適用し、「e 消去ルール」を仮定している。

（2）e 消去ルール：

語幹末分節音がXでない動詞語幹に、テ形接辞 /te/ が続く場合、テ形接辞 /te/ の /e/ を消去せよ。

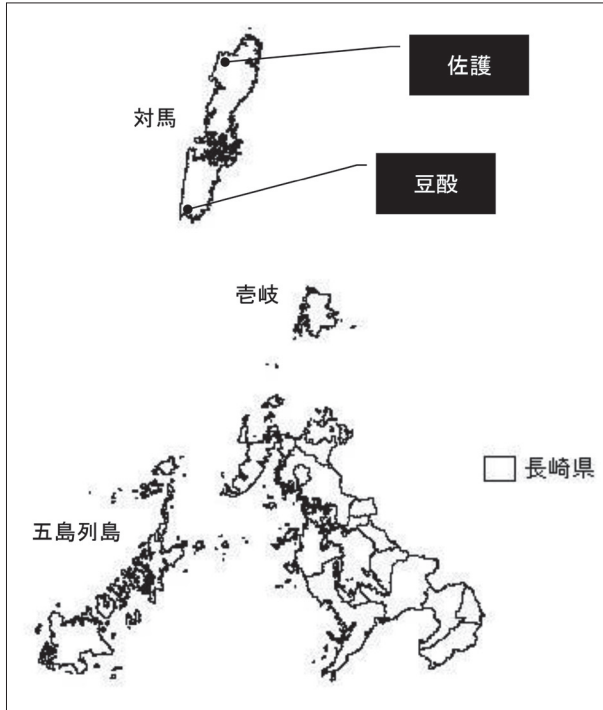
すなわち、このルールのXに方言差が現れると考えているのである。このようなルールを仮定することによって、テ形音韻現象がいくつかの方言タイプに分かれることが判明している。

そこで、本稿では、各方言がどのような方言タイプに分類されるのかについて記述する。さらに、新しく発見された方言タイプについても議論していく。

* 山口大学国際総合科学部、〒753-8541 山口市吉田1677-1, arimoto@yamaguchi-u.ac.jp

2. 言語データについて

本稿で挙げる言語データは、2010年9月（壱岐）、2017年9月（対馬）の現地調査によって収集したものである。収集した地域は、前述の2地点である。それらのおおよその地理的位置を【図1】に示す。



【図1】調査地点（地図は長崎県全域）¹

動詞語幹の種類及び基底形（underlying form）は、次のように仮定する。

（3）動詞語幹の種類・基底形

- a. 子音語幹動詞： /kaw/<買う>, /tob/<飛ぶ>, /jom/<読む>, /kas/<貸す>, /kak/<書く>, /kog/<漕ぐ>, /tor/<取る>, /kat/<勝つ>, /sin/<死ぬ>など
- b. 母音語幹動詞： /mi/<見る>, /oki/<起きる>, /de/<出る>, /uke/<受ける>など
- c. 不規則語幹動詞： /i/~it/<行く>, /ki/<来る>, /s/<する>

言語データは音声記号によって表記する。適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号*はその音声形が不適格であることを表す。また、音声形の直後の記号(古)は古い形である（使用しない）と、インフォーマントが回答していることを示す。また、空欄は調査漏れであることを表す。

本稿では語幹末分節音が α である動詞を「 α 語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が /k/ である動詞、/kak/<書く>は「k語幹動詞」と呼ぶ。「 i_1, e_1 語幹動詞」は、語幹が1音節である i, e 語幹動詞を、「 i_2, e_2 語幹動詞」は、語幹が2音節以上の i, e 語幹動詞をそれぞれ表す（インデックス番号が付いていない場合は両方を含む）。

3. 分析

本節では、各方言のテ形音韻現象について、言語データを挙げつつ考察する（cf. 有元2018:94-101）。

3. 1. 佐護方言

本節では、佐護方言のテ形音韻現象について記述する。テ形の言語データは2名から収集したため、「A氏」「B氏」と区別して考察する。いずれも70代・男性である。

まず、【表1】にA氏の言語データを挙げる。ここから分かるように、佐護方言（A氏）の動詞テ形には「te/de形」「Q/N形」「tsu形」「ʃi/dʃi形」の4種類の形が現れている。ただし、「te/de形」以外の形には、古い形式であるとインフォーマントが判断しているものが多い。

しかし、古い形式だからといって、それが使用されないかという、そうではないようである。例えば、<取ってきた>は [totʃikita] という形しか得られていない。古い形式ではあるが、現在でも使用されているようである。過去形<取った>は [totta] であることから、共通語と同形の [tottekita] が使用されていることは予測できるが、これはインフォーマントからは得られていない。従って、他の古い形式も使用されていると考えた方が良さだろう。

【表1】から、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声抜き出したものが【表2】である。

【表1】佐護方言（A氏）の動詞テ形

語幹		テ形				意味
形式	意味	te/de形	Q/N形	tsu形	ʃi/dʒi形	
kaw	買う	ko:tekita	*kokkita	ko:tsukita		買ってきた
tob	飛ぶ	tondekita				飛んできた
asob	遊ぶ	asondekita				遊んできた
jom	読む	jondekita	*joŋkita			読んできた
kas	貸す	kaʃitekita	*kakkita *kasekkita			貸してきた
kak	書く	kaitekita		ke:tsukita (古)		書いてきた
kog	漕ぐ	koidekita		*ko:tsukita *ke:tsukita		漕いできた
ojog	泳ぐ	ojoidekita		oe:tsukita (古)		泳いできた
tor	取る				totʃikita (古)	取ってきた
kat	勝つ				katʃikita (古)	勝ってきた
sin	死ぬ				ʃindʒikure (古)	死んでくれ
mi	見る		*mikkita		miʃikita *mitʃikita	見てきた
oki	起きる	okitekita	*okikkita	oketsu	okiʃikita (古)	起きてきた
de	出る		*dekkita		deʃikita	出てきた
uke	受ける		ukekkita (古)	ukesukita		受けてきた
it	行く	ittekita *itekita	ikkita		itʃikita	行ってきた
ki	来る	kitekure			kiʃikure (古)	来てくれ
s	する	ʃitekita			ʃiʃikita (古)	してきた

【表2】佐護方言（A氏）における「テ」「デ」に相当する部分の音声

語幹末 分節音	A氏			
	te/de形	Q/N形	tsu形	ʃi/dʒi形
w	te		tsu	
b	de			
m	de			
s	te			
k	te		tsu	
g	de			
r				ʃi
t				ʃi
n				dʒi
i ₁				ʃi
i ₂	te		tsu	ʃi
e ₁				ʃi
e ₂		Q	tsu	
it	te	Q		ʃi
ki	te			ʃi
s/se	te			ʃi

【表2】から分かることは、佐護方言（A氏）は、有元（2020:6-7）で提示した方言タイプのうちのいくつかが混在して現れているように見えるということである。有元（2020）では、テ形音韻現象が見られる方言を、次の通り、大きく4つの方言タイプに分類している。

（4）テ形音韻現象の方言タイプ：

- a. 真性テ形現象方言
- b. 擬似テ形現象方言
- c. 全体性テ形現象方言
- d. 非テ形現象方言

このうち、佐護方言（A氏）に類似した方言タイプを次に挙げる。

【表3】類似した方言タイプ

	TG	PA#	N2
w	te	tsu	ʃi
b	de	dzu	dʒi
m	de	dzu	dʒi
s	te	tsu	ʃi
k	te	tsu	ʃi
g	de	dzu	dʒi
r	te	te	ʃi
t	te	te	ʃi
n	de	de	dʒi
il	Q/te	tsu/te	ʃi
i2	Q/te	tsu/te	ʃi
e1	Q/te	tsu/te	ʃi
e2	Q/te	tsu/te	ʃi
it	te	te	ʃi
ki	te	te	ʃi
s/se	te	te	ʃi

この中で、方言タイプTGは真性テ形現象方言、方言タイプPA#は擬似テ形現象方言、方言タイプN2は非テ形現象方言、それぞれの下位タイプである。

【表1】【表2】と比べて分かるように、tsu形は方言タイプPA#に、te/de形とQ/N形は方言タイプTGに、ʃi/dʒi形は方言タイプN2に、それぞれ現れている。しかも、語幹末分節音が歯音（/r, t, n/）であるか否かによって、その分布が区別されている。このことは、母音語幹動詞においても同様である。

【表4】に、母音語幹動詞の否定形・過去形の言語データを挙げる。

【表4】母音語幹動詞の否定形・過去形

	A氏	
	否定形	過去形
見る	*min	mita
	miran	*mitta
起きる	oken	okita
	*okeran	*okitta
出る	*den	deta
	deran	*detta
受ける	uken	uketa
	*ukeran	*uketta

ここから分かるように、例えば<見ない>が[miran]であることから、<見る>の語幹は/mi/ではなく/mir/であると仮定できる。すなわち、<見る>は母音語幹動詞ではなく、子音語幹動詞（r語幹動詞）なのである。一方、<受ける>においては、その否定形は[uken]であることから、その語幹は/uke/（母音語幹動詞）と仮定できる。ここで【表2】の<見てきた>を見ると、*[mikkita]というQ/N形は不適格となっている。このことは、r語幹動詞において*[tokkita] <取ってきた>が現れていないことと同じ原因である。つまり、母音語幹動詞の分布も子音語幹動詞と同様に記述できるのである。

以上より、何らかのテ形音韻現象が存在することは確かである。ただし、様々な形が混在して分布している。従って、現時点では暫定的に次のように仮定しておく²。

（5）佐護方言（A氏）の方言タイプは、方言タイプTG, PA#, N2が混在するものである。

この混在の仕方については、4節で議論する。

次に、B氏の言語データを【表5】に挙げる。

【表5】佐護方言（B氏）の動詞テ形

語幹		テ形				意味
形式	意味	te/de形	Q/N形	tsu形	ʃi/dʒi形	
kaw	買う	ko:tekita	*kokkita	*ko:tsukita	*ko:ʃikita	買って来た
tob	飛ぶ	tondekita	*toŋkita		*to:ʃikita	飛んできた
asob	遊ぶ	asondekita	*asoŋkita		*aso:ʃikita	遊んできた
jom	読む	jondekita	*joŋkita		*jo:ʃikita	読んできた
kas	貸す	kafitekita ke:tekita	*kakkita *kekkita			貸してきた
kak	書く	ke:tekita				書いて来た
kog	漕ぐ	koidekita *ke:dekita	*koŋkita			漕いできた
ojog	泳ぐ	oidekita				泳いできた
tor	取る	tottekita	*tokkita			取ってきた
kat	勝つ	kattekita	*kakkita			勝ってきた
sin	死ぬ	ʃindekure	*ʃiŋkure			死んでくれ
mi	見る	mittekita *mittekita	*mikkita			見て来た
oki	起きる	okitekita oketekita *okittekita	*okikkita			起きて来た
de	出る	detekita *dettekita	*dekkita		*deʃikita	出て来た
uke	受ける	uketekita *ukettekita	ukekkita			受けて来た
i~it	行く	ittekita itekita	*ikkita			行って来た
ki	来る	kitekure	*kikkure			来てくれ
s	する	ʃitekita	*ʃikkita *sekkita			してきた

【表6】共通語の「テ」「デ」に相当する部分

語幹末分節音	B氏
w	te
b	de
m	de
s	te
k	te
g	de
r	te
t	te
n	de
il	te
i2	te
e1	te
e2	te, Q
i~it	te
ki	te
s/se	te

【表5】から、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声抜き出したものが【表6】である。

ここから分かるように、大部分がte/de形である。Q/N形が現れているのは、e₂語幹動詞である [ukekkita] <受けて来た>だけである。母音語幹動詞の否定形・過去形は【表7】の通りである。

【表7】母音語幹動詞の否定形・過去形

	B氏	
	否定形	過去形
見る	*min	mita
	miran	*mitta
起きる	oken	oketa
	*okeran	*oketta
出る	den	deta
	deran	*detta
受ける	uken	uketa
	*ukeran	*uketta

【表7】を見る限り、＜受ける＞の語幹は/uke/と仮定できる。ただし、＜起きる＞＜出る＞の語幹もそれぞれ/oke/, /de/と仮定できることから、＜受ける＞と同様、テ形に促音が現れることも予測できるが、実際には現れていない。

以上より、方言タイプを次のように仮定できる。

(6) 佐護方言（B氏）の方言タイプは、真性テ形現象方言（タイプTG方言）である。

3. 2. 豆酸方言

本節では、豆酸方言のテ形音韻現象について考察する。まず、豆酸方言の動詞テ形の言語データを【表8】に挙げる。話者は80代・女性である。

【表8】豆酸方言の動詞テ形

語幹		テ形			意味
形式	意味	te/de形	Q/N形	ʃi/ɔʃi形	
kaw	買う			ko:ʃikita	買って来た
tob	飛ぶ			*to:ɔʃikita	飛んできた
asob	遊ぶ			aso:ɔʃikita asu:ɔʃikita	遊んできた
jom	読む			jo:ɔʃikita	読んで来た
kas	貸す			ke:ʃikita	貸して来た
kak	書く			ke:ʃikita	書いて来た
kog	漕ぐ			ke:ɔʃikita	漕いできた
ojog	泳ぐ			oe:ɔʃikita	泳いできた
tor	取る	tottekita	*tokkita	*to:ʃikita	取って来た
kat	勝つ	katttekita	*kakkita	*ka:ʃikita	勝って来た
sin	死ぬ	ʃindekure	*ʃinjkure	*ʃi:ɔʃikure	死んでくれ
mi	見る	mittekita *mittekita	*mikkita	*miʃikita	見て来た
oki	起きる	okitekita *okittekita	*okikkita	okiʃikita	起きて来た
de	出る	detekita *dettekita	*dekkita	*deʃikita	出て来た
uke	受ける	uketekita *ukettekita	*ukekkita	ukeʃikita	受けて来た
i	行く	itekita	*ikkita	*iʃikita	行って来た
ki	来る	kitekurenne	*kikkure:	*kiʃikure:	来てくれ
s	する	ʃitekita	*ʃikkita *sekkita	*ʃiʃikita	して来た

また、【表8】から、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声を抜き出したものが【表9】である。

これらを見ると分かるように、語幹末分節音が歯音である場合、ʃi/ɔʃi形が現れず、te/de形しか現れていない。従って、方言タイプとしては、擬似テ形現象方言（タイプPA方言）であると仮定できる。

ただし、方言タイプPAと大きく異なる点は、＜遊ぶ＞＜読む＞＜漕ぐ＞＜泳ぐ＞において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に [ɔʃi] が現れていることである。これは、「有声性順行同化ルール」の適用を受けたものと考えられる。このルールは、有元（2007:46）では次のように仮定されている³。

【表9】 共通語の「テ」「デ」に相当する部分

語幹末分節音	豆酩方言
w	ɸi
b	dʒi
m	dʒi
s	ɸi
k	ɸi
g	dʒi
r	te
t	te
n	de
il	te
i2	te, ɸi
e1	te
e2	te, ɸi
it	te
ki	te
s/se	te

(7) 有声性順行同化ルール：

語幹末分節音が有声音であるとき、形態素境界を挟んで直後の子音を有声音にせよ。

もう1点注目すべき箇所は、b語幹動詞である。ここでは、*[to:dʒikita] <飛んできた>は不適格であるにもかかわらず、[aso:dʒikita], [asu:dʒikita] <遊んできた>は適格である。両者とも同じb語幹動詞でありながら、テ形の適格性は異なるのである。有元(2007:212)では、これを次のような条件によって説明している。

(8) 音節数条件：1音節語幹の場合は排除される。

これは、テ形音韻現象を記述するために仮定されたコアルールである「e消去ルール」が1音節語幹の動詞に適用されることを避けるという条件である。

以上の2点において、タイプPA方言とは異なっているが、ほぼ同じ方言タイプと仮定しても構わないだろう。

また、母音語幹動詞に関しても子音語幹動詞と同様に扱っても問題ないと考える。母音語幹動詞の否定形・過去形を【表10】に挙げる。

【表10】 母音語幹動詞の否定形・過去形

	豆酩方言	
	否定形	過去形
見る	*min	mita
	miran	*mitta
起きる	okin	okita
	*okiran	*okitta
出る	den (古)	deta
	deran	*detta
受ける	uken	uketa
	*ukeran	*uketta

【表10】より、<見る><出る>の語幹はそれぞれ/mir/, /der/と仮定できる。これらは、r語幹動詞と同様に振る舞うため、共通語の「テ」「デ」に相当する部分には[te]しか現れないのである。

以上より、豆酩方言の方言タイプを次のように仮定する。

(9) 豆酩方言の方言タイプは、擬似テ形現象方言(タイプPA方言)である。

4. 佐護方言(A氏)の新たな方言タイプ

3. 1節において、佐護方言(A氏)の方言タイプについて次のように仮定した。再録する。

(10) 佐護方言(A氏)の方言タイプは、方言タイプTG, PA#, N2が混在するものである。

再度、動詞テ形の言語データに戻ってみると、インフォーマントのコメントからtsu形とɸi/dʒi形は古い形であるとのことであった。未調査の部分が多いが、両形を比較してみると、特に子音語幹動詞では両形が相補分布を成しているようである。このように考えると、方言タイプPA#に類似した別の新たな方言タイプが予測される。これを仮に「方言タイプPA#2」と呼んでおく。共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れると予測される音声を【表11】に挙げる。

【表11】のようになるとすると、テ形接辞の基底形は/ti/と仮定できる。これによって、語幹末分節音が歯音の場合は、e消去ルールの適用を受けず、/ti/が[ɸi], [dʒi]として現れる。また、w, b, m, s, k, g語幹動詞には、方言タイプPA#と同様、基本的に[tsu], [ɕu]が現れる。いずれの場合も、/ti/→/tu/となる「テ形接辞i/u交替ルール」が必要となる。

【表11】 予測される方言タイプ

語幹末分節音	方言タイプPA#2
w	tsu
b	tsu/dzu
m	tsu/dzu
s	tsu
k	tsu
g	tsu/dzu
r	ʃi
t	ʃi
n	dʒi
il	tsu/ʃi
i2	tsu/ʃi
e1	tsu/ʃi
e2	tsu/ʃi
it	ʃi
ki	ʃi
s/se	ʃi

また、母音語幹動詞の場合は、r語幹化の程度によって [tsu], [ʃi] のいずれが現れるかが異なる。

一方、【表1】【表2】から、タイプTG方言の可能性も考えられる。タイプTG方言は真性テ形現象方言の崩壊の最後の段階の方言タイプであるため、本方言では消滅しつつあるのかもしれない。それゆえ、方言タイプPAとTGはペアで現れることがしばしばある。例えば、両方言タイプが一人の話者に同時に現れる「共生タイプ」は、その典型である (cf. 有元2015)。

以上より、「方言タイプPA#2」は、共時的にはあり得る方言タイプであると仮定できるだろう。

なお、te/de形であるが、すべての動詞においてこれが現れる場合には、共通語と同じ分布であるため、現在使用されている可能性は高い。

5. 壱岐方言のテ形音韻現象との比較

本節では、対馬方言に最も近接する壱岐方言（壱岐市芦辺町）のテ形音韻現象を見てみる。両者の比較をすることによって、関連性を探ることが目的である。

本方言の動詞テ形を【表12】に挙げる。本節における言語データは、有元（2014:53-55）から引用する。

【表12】 芦辺町方言の動詞テ形

語幹	テ形	意味
kaw<買う>	ko:ʃikita	買ってきた
tob<飛ぶ>	to:dʒikita	飛んできた
jom<読む>	jo:dʒikita	読んできた
ogam<拝む>	ogo:dʒikita	拝んできた
kas<貸す>	ka:ʃikita	貸してきた
kak<書く>	ke:ʃikita	書いてきた
kog<漕ぐ>	ke:dʒikita	漕いできた
tor<取る>	totʃikita	取ってきた
kat<勝つ>	katʃikita	勝ってきた
sin<死ぬ>	ʃindʒimiro	死んでみる
mi<見る>	miʃikita *mitʃikita	見てきた
oki<起きる>	*okiʃikita okeʃikita *oketʃikita	起きてきた
de<出る>	deʃikita *detʃikita	出てきた
uke<受ける>	ukeʃikita *uketʃikita	受けてきた
it~itate<行く>	itaʃikita	行ってきた
ki<来る>	kiʃimiro	来てみる
s<する>	ʃiʃikita	してきた

この言語データから、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声抜き出すと、【表13】になる。

【表13】 共通語の「テ」「デ」に相当する部分

語幹末分節音	芦辺町方言
w	ʃi
b	dʒi
m	dʒi
s	ʃi
k	ʃi
g	dʒi
r	ʃi
t	ʃi
n	dʒi
il	ʃi
i2	ʃi
e1	ʃi
e2	ʃi
it~itate	ʃi
ki	ʃi
s	ʃi

【表12】【表13】を見ると、すべての動詞において [ŋi] あるいは [dʒi] が現れている。従って、方言タイプを次のように仮定できる。

- (11) 芦辺町方言の方言タイプは、非テ形現象方言（タイプN2方言）である。

このことから、佐護方言（A氏）の方言タイプに現れるŋi/dʒi形には、本方言の方言タイプの影響である可能性があると考えられる。

参考までに、母音語幹動詞の否定形・過去形を【表14】に挙げておく（記号%は相対的によく使用する形を示す）。

【表14】母音語幹動詞の否定形・過去形

	芦辺町方言	
	否定形	過去形
見る	min	mita
	miran	*mitta
起きる	oken	oketa
	*okeran	
出る	%den	deta
	deran	
受ける	%uken	uketa
	ukeran	

本方言の場合、これがテ形音韻現象に影響を与えることはない。

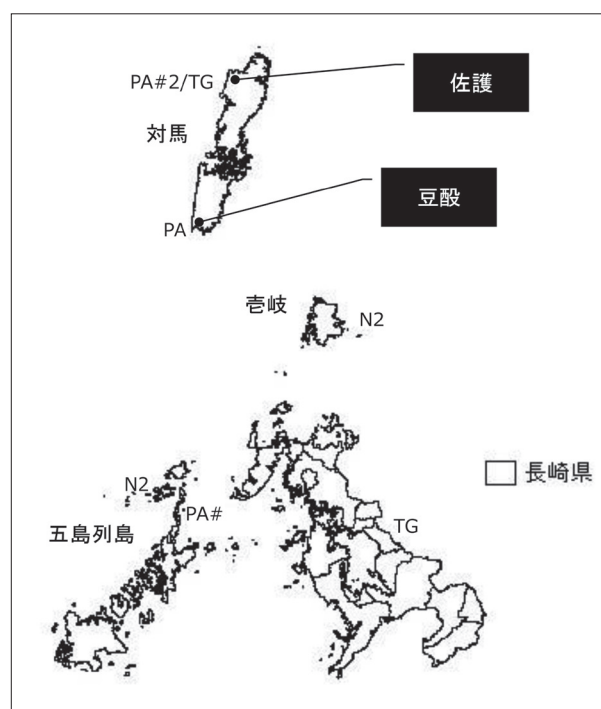
6. 地理的分布

本節では、地理的分布を考察する。これによって、地理的分布が「方言タイプPA#2」の形成に影響を与えているかどうかについて検討する。

【図1】に、本稿で明らかになった方言タイプ、及び近隣の方言タイプを記入したものを、【図2】に示す⁴。

まず、対馬全体としては、擬似テ形現象方言のようである。タイプPA#方言は、近隣では南松浦郡新上五島町津和崎（中通島）に見られるだけである（cf. 有元2007）。

タイプTG方言は、長崎県では諫早市（旧北高来郡）小長井町や東彼杵郡東彼杵町（駄地郷）に見られている（cf. 有元2008, 2009）。



【図2】テ形音韻現象の地理的分布

また、タイプN2方言は近隣の壱岐や五島列島・小値賀島（笛吹・前方）に見られる。ŋi/dʒi形が現れていることは、ひょっとすると関連があるのかもしれない（壱岐方言については5節参照）。

以上、いずれの方言タイプも、船舶航路などのいわゆる“海の道”で繋がっているため、何らかの影響を受けている可能性は高い。従って、「方言タイプPA#2」が現れる可能性も高いと考えられる。

7. おわりに

本稿では、長崎県対馬・壱岐の4方言を対象として、動詞に起こるテ形音韻現象を記述した。その結果、佐護方言には、方言タイプPA#に非常に類似した「方言タイプPA#2」を仮定できる可能性が高いことが判明した。このことは、PAという方言タイプ自体にさらにバリエーションが見つかったことになるため、方言タイプ全体の整理があらためて必要となるだろう。

その一方で、方言タイプのバリエーションはどこまで可能なのかという疑問も湧いてくる。今回は、言語データが不足していることもあり、新たな方言タイプを予測したにとどまるが、「あり得る方言タイプ」と「あり得ない方言タイプ」はどのように決定されるのかという問題については、今後慎重に検討していくべきである。

また、「方言タイプPA#2」が想定される佐護方言（A氏）には、古い形と新しい形が混在している。これらの通時的な変化の過程についても解明が待たれる。

【注】

- 1 【図1】は、国土交通省国土政策局「国土数値情報（行政区域データ）」(<https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/>) をもとに、筆者が地理情報分析支援システム MANDARA 10 (<https://ktgis.net/mandara/>) を使用して編集・加工したものである。
- 2 有元（2018：98）では「擬似テ形現象方言の崩れか。音声的にはPA#に類似（w, k語幹動詞）」としていた。
- 3 適用環境である「語幹末分節音が有声音」は、w語幹動詞への適用を避けるため、「語幹末分節音が有声音」と修正すべきである。ただし、(7)では有元（2007：46）のまま挙げている。
- 4 現時点までに判明している九州全域の方言タイプの地理的分布については、有元（2020：25）を参照されたい。

【参考文献】

- 有元光彦（2007）『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』ひつじ書房。
- 有元光彦（2008）「長崎県中北部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢（山口大学教育学部）』第57巻・第1部, pp.1-13.
- 有元光彦（2009）「長崎県中南部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢（山口大学教育学部）』第58巻・第1部, pp.15-31.
- 有元光彦（2014）『九州方言におけるテ形音韻現象の記述的・構成的研究』平成23～25年度科学研究費・基盤研究（C）「九州方言の音韻現象における接触・伝播・受容プロセスに関する研究」（No.23520554）・研究成果報告書。
- 有元光彦（2015）「共生タイプについて—九州西部方言の動詞におけるテ形音韻現象を対象として—」『方言の研究』第1号, 日本方言研究会編, pp.185-208.
- 有元光彦（2018）『九州方言におけるテ形音韻現象の記述的研究』平成26～29年度科学研究費・基盤研究（C）「九州方言音韻現象の方言崩壊ヒストリーに基づく方言形成シナリオの構築」（No.26370540）・研究成果報告書。
- 有元光彦（2020）「九州方言におけるテ形音韻現象の崩壊について」『言語研究』158, 日本言語学会編, pp.1-28.